埋文よこはま31

・独川流域の横穴墓
・不思議な土器

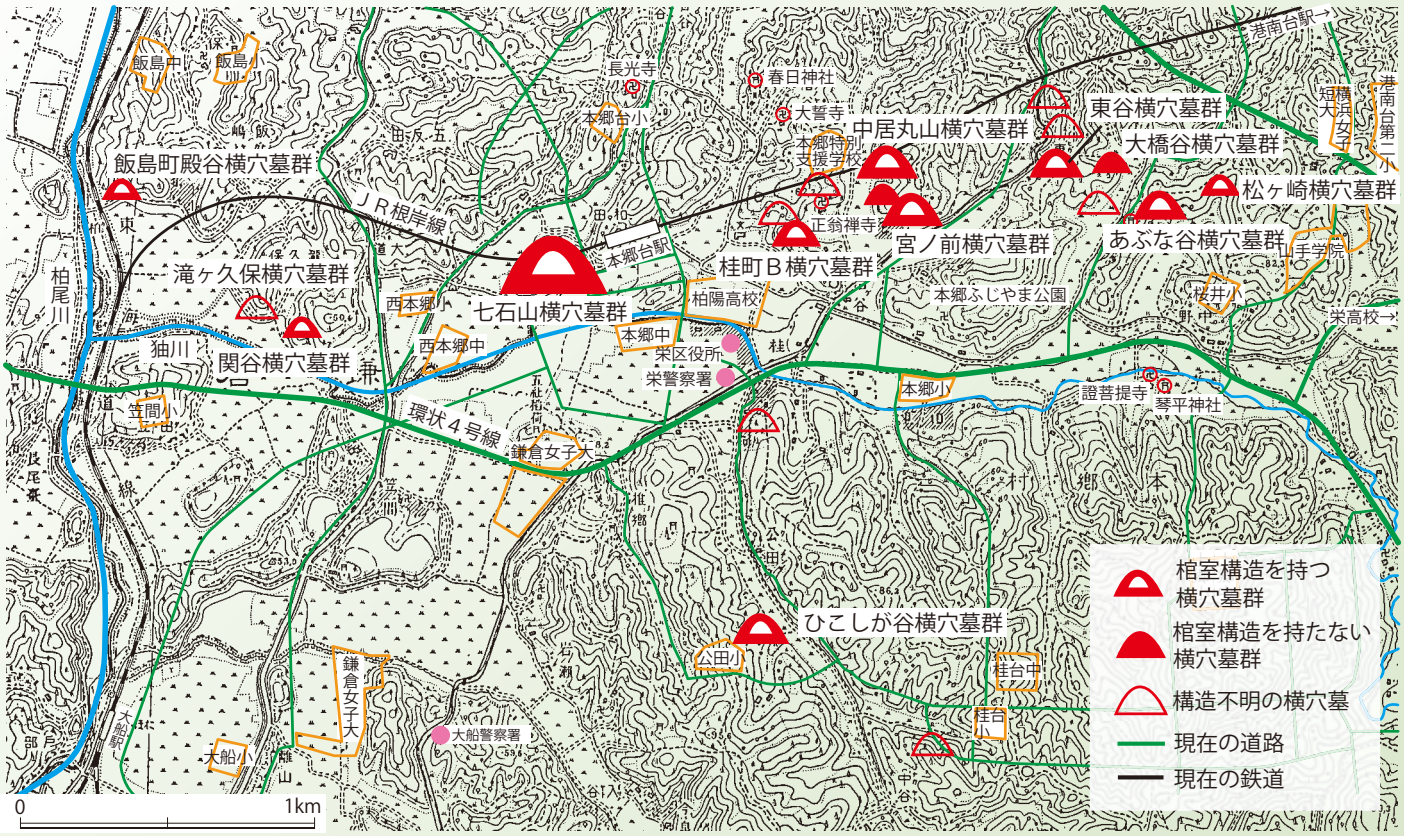
横穴墓の玄室の様子。奥に“棺室”が掘り込まれている。（栄区宮ノ前D－１号墓、７世紀ごろ、玄室高１.７ｍ）

独川流域の横穴墓

―栄区に分布する古墳時代終わり頃の特殊な横穴墓―

横浜市の最南部、相模湾にそそぐ柏尾川の支流である独川流域は、古墳時代の終わりごろに造営された横穴墓群の一大分布域です。横穴墓とは、盛土して築く古墳と異なり、崖面に直接墓室を穿つ、古墳時代後期～終末期に盛行した墓制のこと。神奈川県域はとくに多く、その中でも横浜市栄区を含む旧鎌倉郡域は特殊な構造を持つ横穴墓が見られることで知られています。その特殊な構造とは「棺室」と呼ばれるもので、遺体を葬る「玄室」のさらに奥に、小さな部屋の様な空間を掘り込んでいるのです。それはあたかも、玄室の壁に小窓をしつらえたかのような、ちょっとユーモラスな造形を呈しています。今回はそんな独川流域の横穴墓群をご紹介します。

→次頁へつづく



横浜市栄区独川流域の横穴墓の分布

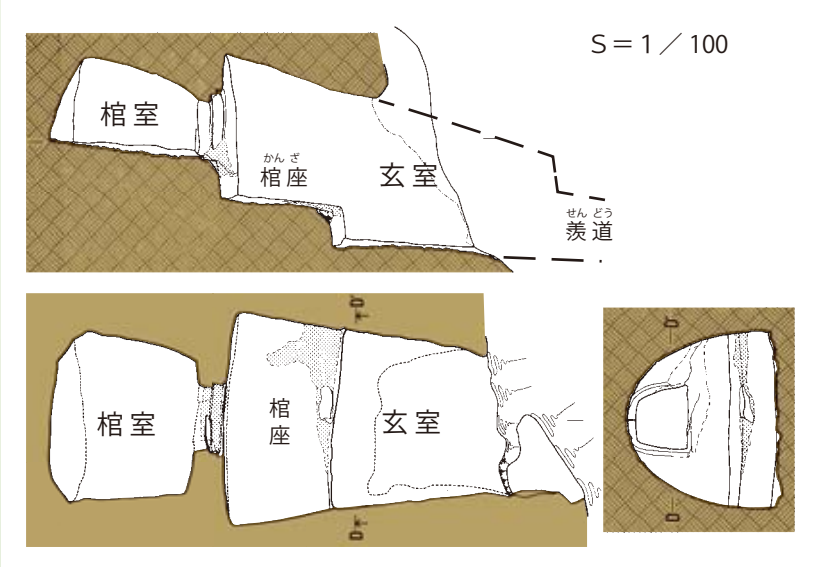
国土地理院所蔵　二万分の一「戸塚」（明治36年）に加筆
※おおよその位置が分かるように現代の鉄道･道路･学校等も掲載しています。

◆独川流域の横穴墓群

独川流域では、現在残っているものや、記録上で存在が明らかなものなど、約20カ所の横穴墓群が確認されています。その総数は実に200基以上となりますが、記録上に残らずに隠滅してしまったものや、まだ未発見のものなどが存在する可能性もあり、実際に築造された数はもっと多かったものと思われます。

この流域の横穴墓については、まず地域の考古学者である赤星直忠氏によって基礎的研究が行われ（『鎌倉市史』考古編　昭和34年）、また岩本義雄氏を中心とする鵠沼女子高等学校地歴研究部によって、宮ノ前横穴墓群などの多くの横穴墓について実測図が作成されました（『横浜市戸塚区独川流域の横穴群について』昭和39年）。その結果、この地域の横穴墓が「棺室」という独自な構造をもっていることがあきらかになったのです。

その後、根岸線の開通に伴う市街地化の波が押し寄せ、多くの横穴墓が失われましたが、七石山横穴墓群Ｂ支群や宮ノ前横穴墓群は現在も保存され、とくに後者は間近で見学できるように整備されています。



「棺室」構造をもつ横穴墓（七石山横穴墓群Ｃ支群45号横穴墓）

◆横穴墓の構造

石を積んで造る「横穴式石室」と異なり、崖面に直接穴を穿って構築する横穴墓は比較的制約が無い自由な造形でデザインすることができます。そのため、各地で実に様々な形の横穴墓が造られました。例えば、天井構造にしても、平形・アーチ・ドーム・家形などがあります。独川流域では、基本的に長台形の平面にアーチ天井をもっています。またこの地域に特徴的な「棺室」は、玄室の奥壁に穿たれています。これは、おそらく玄室に葬られた遺体が骨化した後に、骨だけ改葬する場所だったと考えられますが、詳しいことは分かっていません。

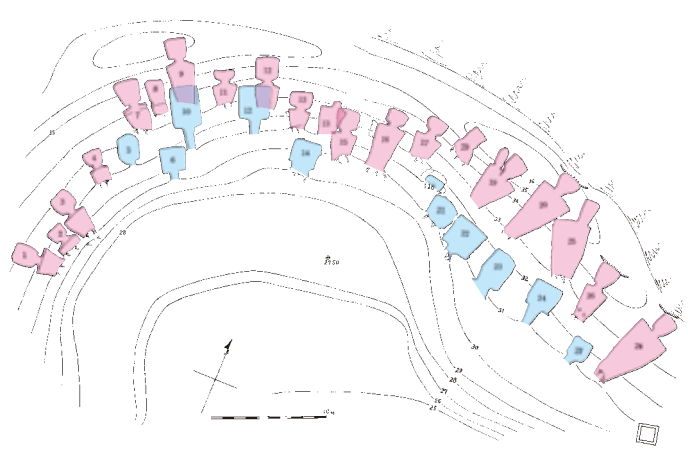
七石山横穴墓群Ａ支群全景　昭和43年調査当時

◆七石山横穴墓群

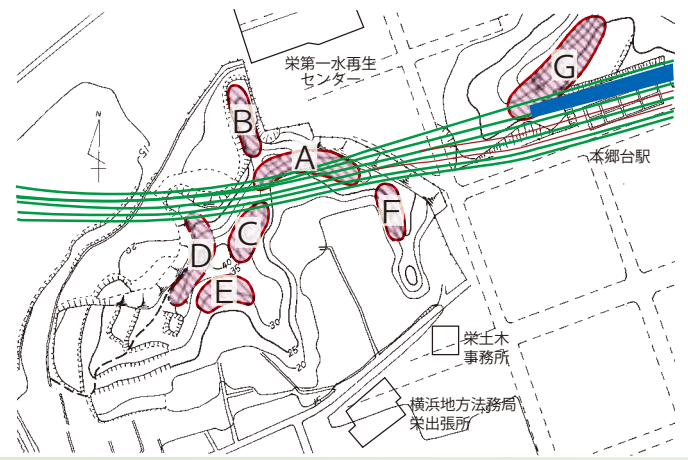
現在の本郷台駅の西方にあった高さ約30mの独立丘陵崖面に造営された、独川流域で最大規模を誇る横穴墓群です。Ａ～Ｇの７支群で総数75基以上が確認されています。昭和43年に現在のJR根岸線を通すための工事によってＡ支群が破壊の危機に直面し、緊急調査が行われました。その結果、谷に面した崖面に28基の横穴墓が確認され、そのうちの11基から、副葬品や墓前祭に使用された土器が出土しています。出土遺物には、大刀、鉄鏃（矢じり）、銅釧（腕輪）、ガラス製・石製の玉類（アクセサリー）などがあります。

Ａ支群の調査結果で興味深いのは、２段に掘り込まれたうちの、上段のものは棺室構造をもつ横穴墓がつくられ、下段のものは棺室構造をもたないという点です。両者の違いを年代差と見るか、被葬者の出自の違いと見るか、様々な解釈が想像できます。

現在は、駅周辺の開発に伴って、残念ながらほとんどの支群が失われていまいましたが、北側のＢ支群のみは保存され、今もその姿をみることができます。



七石山横穴墓群Ａ支群全体図



七石山横穴墓群全体図

◆宮ノ前横穴墓群

根岸線本郷台駅の東方約１kmの、南面する丘陵崖面に掘られた横穴墓群です（栄区鍛冶ヶ谷二丁目）。二群25基が確認されていますが、東側の一群（Ｂ・Ｃ・Ｄ群）と、西側の一群（Ａ群）の東半分は棺室構造を持つのに対して、最も西側の数基は棺室構造をもたないものです。

この横穴墓群はすでに昭和33～34年に鵠沼女子高等学校地歴部によって調査されましたが、平成25年になって、付近を「鍛冶ケ谷市民の森」として整備することになり、その計画に伴って改めて一部の追加調査が行われました。現在は整備も終わり、高い技術で構築された端整な横穴墓の姿を現地で見学することができます。

整備が終了し、公開された宮ノ前横穴墓群

不思議な土器

右の土器は横浜市都筑区の「矢崎山西遺跡」（別名柚木台遺跡）から出土した弥生土器の壺です。細かい年代を言えば、弥生時代中期後半の「宮ノ台式土器」と呼ばれる時期のものです。

高さは約62cmもあり、大型です。横浜市の北部の土器は橙褐色の胎土が多いので、こうした白い胎土は大変珍しいと言えます。また黒斑（焼きムラ）が広い範囲に出ています（中央の黒い部分）。

さて、文様は頸から肩にかけて三条の帯縄文をめぐらせていますが、この土器の面白いところはその下に絵画の様なものが描かれていることです。一番下の帯縄文の直下に平行線が充填された「U」字状のものが一周描かれています。その下には渦巻き文様が、やはり土器の胴部を一めぐりしています。さらにその間に二重の楕円形の何かが、写真手前側だけに描かれているのです。

横浜市都筑区矢崎山西遺跡出土弥生土器
高さ約62cm（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター所蔵

絵画部分拡大

左の写真は、その部分の拡大図です。上部の「U」字は、文様と見るには稚拙で絵画のようです。山や丘を表しているのでしょうか。また下部の渦巻き模様も宮ノ台式には見られないものですが、銅鐸の渦巻文を真似たようです。こちらは波立つ海を表しているようにも見えます。二重の楕円形は何に見えるでしょうか。舟でしょうか。銅鐸や土器に描かれるシカの胴体は二重線で表現されますので、ひょっとすると、これも群れるシカを表したのかもしれません。いろいろな想像が浮かびますが、正解は解りません。いずれにせよ弥生人の世界観の一端が垣間見れる土器です。

参考：白石哲也　2015「資料紹介　横浜市矢崎山西遺跡出土の弥生土器について」『横浜市歴史博物館紀要』第19号

「埋文よこはま」は横浜市域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋蔵文化財センターのご案内

ＪＲ根岸線「港南台」駅
２番バス乗り場より神奈中バス港36・86系統「上郷ネオポリス」行き、または港40系統「栄プール」行き、「上郷ネオポリス」下車　徒歩１分

京浜急行「金沢八景」駅
国道沿い１番乗り場より神奈中バス金24･25系統「上郷ネオポリス」行き、終点「上郷ネオポリス」下車　徒歩１分

・見学等の施設利用は、平日の９～17時となっています（受付16時まで）。
・施設利用にあたっては、事前にご連絡ください。

埋文よこはま31

発　行　日　2015年３月20日
編集・発行　公益財団法人　横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター
〒247-0024　横浜市栄区野七里２－３－１
TEL. 045-890-1155
FAX. 045-891-1551